



生産量が少なく、
幻の「天王トマト」を守りながら、
新しいことに目を向け、
能勢町・天王を
より盛上げていきたい！

地域の農を支える生産者

能勢町天王地域

ひがしみのる

東 稔さん

(75歳)

幻の「天王トマト」



大阪府のてっぺんに位置する能勢町の中でも最北の地「天王」。標高が約500mと高く、棚田での水稻栽培や、昼夜の寒暖差を利用したトマトの栽培がされている地域です。大阪府、京都府、兵庫県と3府県に通じる道路があり、古くは京都府の亀岡や兵庫県の丹波等と山陰を結ぶ裏道という恵まれた立地で、寒くなる気候を活かし、昭和20年ころまでは、こおり豆腐の产地としても栄えていたそうです。

「天王トマト」は昭和30年ころ、当時この地で農業を始めかけた方がトマトを栽培したところ、通常より品質の良いトマトが育ちました。その上、

収穫時期が遅く、市場のトマトが少なくなった時に、「天王トマト」が出荷され、とても重宝されました。標高500mの高地では昼夜の寒暖差が大きいため、日中に蓄えた栄養は夜間に消費されにくくなり、より美味しいトマトになります。

昭和42年ころには、「天王トマト」の栽培農家は約20軒で共同選果しながら品質を守る一大産地となりました。冬はとても寒く、土壤の中の大腸菌などの雑菌が生存しにくい土地で育てられた「天王トマト」は、高原清浄野菜としても人気になりました。現在は高齢化や後継者不足などの理由から

「天王トマト」の栽培農家も減少し、4軒ほどになってしまいました。

東さんの「天王トマト」は気候に合わせて、先人の知恵と、独自の工夫で育てられています。天王にある酪農牛舎から出る牛糞を使用した堆肥や落ち葉等の堆肥を使い栽培されています。

「やっぱり「天王トマト」は美味しい！」と思えるようなトマトをこれからも作りたいです。そして、より多くの人に知って頂き、約65年の歴史がある「天王トマト」の価値をもっと評価して欲しいです。」と東さん。

「天王地域をより盛上げていきたい。」

天王の豊かな自然に囲まれた圃場では鹿や猪の被害が多く、地域に3名ほどしかいない獣友会のメンバーとしても活躍している東さんが、就農したのは高校3年の時。お父様が体調を崩されたことで農地を譲り受けました。その後3年ほど専業農家として「天王トマト」やお米の栽培をされていましたが、公務員ならば休みが定期的で、農業と両立が出来ると思い、能勢町の学校事務に就職。65歳までは公務員と米作りを行い、退職後に体調を崩したこともあり、体調を考慮しながら農業をしておられます。そして、「天王トマト」を栽培することが地域おこし

しに繋がるとして、再度「天王トマト」を栽培し始めたのは約6年前。

「農業は無限の可能性があると思います。そのまま食べることも、加工品にして付加価値を付けることも、販売することで、様々な業種の人との関係が出来ます。そして、人が集まつてくると、新しい考え方や思いが集まり、地域で助け合い、能勢町以外の人も集まってきて、さらに能勢町が良くなって欲しいです」と話す東さんは、能勢天王地域おこしの会にも参加されています。

能勢町天王に小型ロケットの実験場

能勢町天王に小型ロケットの打ち上げ実験場があることをご存知ですか？ 大学生などが小型ロケットを約200mまで打ち上げて燃焼実験等を研究したり、子ども向けのロケットを作る体験などを通して、将来の技術者を支える施設で、能勢天王地域おこしの会が管理しておられ、東さんはそここの運営も携わっています。自宅には川を使用した水力発電なども設置されています。

「新しいことにも目を向け、更に能勢町、天王を発展させたい」と活動される東さんや能勢天王地域おこしの会の活躍にこれからも目が離せませんね。



100年前に東さんのおじい様らがこの地の開墾されたことを記念して建てられた石碑。

能勢天王地域おこしの会とは

能勢町天王地区を過疎から守り、故郷を活気ある場所として育てる目標とした活動で「自然との共生」「地産地消」「自然エネルギー利用」「老人社会への対応」「過疎対策」の実行を行なう非営利団体です。ロケット部会、環境エネルギー部会、農業部会、歴史観光部会からなり、様々な地域の発展活動を担っています。

公式ホームページがあります。「能勢天王地域おこしの会」と検索！